

アトス山聖パンテレイモン修道院レクショナリーの
「神殿奉献」図像解釈に関する一考察

清水悠佑 (早稲田大学)

963 年に聖アタナシオスが皇帝ニキフォロス 2 世フォカスの支援の下、メギスティ・ラヴラ修道院を創建して以降、聖山アトスは修道活動の中心地として機能してきた。そのアトス山中部の聖パンテレイモン修道院が所蔵するレクショナリー (Cod. 2、以降「当写本」) は、非常に豊富な装飾が施された写本である。各福音書テキストを典礼暦に沿って再編集した写本ジャンルであるレクショナリーは、写本制作やパトロン活動の実態を把握し得るものとして近年注目が向けられるマテリアルであるが、当写本を集中的に扱う先行研究は極めて少なく、制作年代も 11 世紀末から 12 世紀前半の間で未だに議論がある。当写本装飾の特徴の一つとして、一部を除く全頁大挿絵が同一フォリオのレクト (表) 及びヴェルソ (裏) 面の双方に描かれる点が挙げられる。とりわけ、キリスト幼児伝の一つである「神殿奉献」(ルカ 2: 22-40) を描く対の挿絵では、レクト面に類例のない図像が残される。この「神殿奉献」図像の解釈については、複数の先行研究において言及されるものの、一致した見解が得られないままである。本発表では、神学や 11-12 世紀に多様化する図像の分析を通じて、当写本の「神殿奉献」図像の解釈に一定の見解を提示する。

まず、初期から中期ビザンティン時代に活動した教父や主教の著作のうち、「神殿奉献」を扱う代表的な資料の検討を行う。これを通して、当主題になされる多様な神学解釈が大きく二つの場面と結び付けられる点を指摘する。すなわち、幼子イエスと老祭司シメオンの「出会い」を表す場面は、キリスト論や救済論を強調し、聖母に対するシメオンの「受難の予告」とそれに伴う人間的感情表現は、マリア論や受難サイクルとの相関を示す場面と考えられる。特に前者の「出会い」は、神が人々の前に姿を示すテオフアニアを含意すると考える。

9 世紀頃には定型が描かれ始め、それ以降比較的变化が少ない「神殿奉献」図像であったが、中期ビザンティン期、とりわけ 11-12 世紀に図像ヴァリエーションの発展が顕著になる。さらに、同時期のビザンティン美術は、先行研究で「典礼化」の動向が指摘されており、典礼及び装飾プログラムの核となる十二大祭が形成される。「神殿奉献」はこの十二大祭に組み込まれることから、「美術の典礼化」とは無関係ではない。「神殿奉献」図像は、「美術の典礼化」に伴い、受難の物語との連関が好まれた結果、テオフアニア的「出会い」から「受難の予告」へとその焦点が移行し、多様化した。

以上を踏まえ、当写本に描かれるレクト面の例外的「神殿奉献」図像は、テオフアニア的な「出会い」を概念的に描き、一方のヴェルソ面は、「受難の予告」を幼子が受け入れる場面を描くと解釈するも、中期ビザンティン期以降に主流となる聖母の憂いを強調する意図は希薄であるとした。